

現役教師ですが “教育”について こんなことを考えてます。

— これからの教育を担う人たちへ —

受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。
毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

今月のテーマ：学級経営悪戦苦闘

学校生活を送る上で、良好な学級経営は大事ですが、これが案外難しいもの。先生の気持ちとは裏腹に、うまくいかないこともしばしばです。今回は野中先生に学級経営の悪戦苦闘の日々を伺いました。

著 野中勇樹

宮城県気仙沼市出身。平成27年
小学校教諭になる。現在、千葉県
八千代市立大和田小学校教諭。

先生なんか大っ嫌いだった

私は、小学校4年生の時に、尾崎豊に出会ってからというもの、学校の先生の大嫌いで、よく先生と衝突していた子どもでした。それはそれは大変な子どもで、自分が先生となった今、その頃の自分を担任したら、骨が折れるだろうと思います。それでも、どんなに反抗をしても、私の味方でいてくれた先生がいました。そのことを思い出し、気付いたら、進路希望の紙に教育学部と書いていました。そして、それが今日の私に続いています。

だれのための授業なの？

私が先生となって3年目の時、市内の先生の前で授業をするという大役が巡ってきました。評価を上げたいと躍起になっていた私にとって、絶好のチャンスです。その緊張から張りつめていて、学年の先生とは仲違いするし、子どもたちにも優しくできなくて辛かったのを今でも覚えています。授業は体育。その単元の授業が始まってからは、当日うまくいき

ますようにと神社でお願いをする毎日でした。

さあ、授業の当日となりました。私の「集合！」という号令に、子どもたちは機敏に反応し、立膝にして私の言葉を待ちます。しかし、1人だけ座り方が違う子がいました。すると、1人の女の子が「早く立膝にして！ 野中先生の評価が下がっちゃう！」と言い、すかさず私が、「そんなことじゃ、先生の評価は下がらないよ！」とつつこんで、会場は大笑い。たくさんのご指導はありましたが、見学に来た先生方からは、良い授業だったとか、子どもたちに好かれているなどなかなかの好評価を受けました。

終わった後、先輩の先生に授業のことを聞かれ、ここぞとばかりに、笑いから始まったこの授業を得意気に話しました。先輩の表情はどんどん暗くなって、「だれのために授業をしたんだ。」と言ったきり、がっかりした表情のまま。どうしてそんな顔をするのか、あの頃の私には分かりませんでした。

子どもたちからNOを突き付けられた日

私が5年生の担任だった時の話です。私は、背が

低いです。子どもから「ちび先生！」と呼ばれているのを聞かれて、同僚の先生から本気で心配されたこともありました。なので、5年生を担任すると決まった時、「子どもになめられちゃダメだよ。」としきりに言われました。そうなりたくなくて、子どもの前で間違えないこと、毅然とした態度で接することをすごく意識しました。宿題忘れ、授業中の私語、返事の大きさ、朝の会の歌の活気、挙げればきりが無いほど細かなこと一つひとつが、学級崩壊につながるかもしれないいつも怖かったのです。「いいよ！君が思ったようにやっごらん。」なんて口が裂けても言えませんでした。気が付いたら、休み時間の楽しいおしゃべりすら消えていました。

そして、その日が来ました。校長室に呼ばれて、クラスの子どもたちが自分のことをどう思っているかを聞かされました。その内容は、私が小さい頃に先生に対して嫌だと感じていたことそのものでした。景色が歪んで見えてきて、頭の中が真っ白になりました。なんとか持ちこたえましたが、「6年生には、持ち上がれないかもしれない」と聞いた時、ついに涙がこぼれました。それは、持ち上がれなかった自分のことを周りの先生はどんなふうに見てくるのだろう、という自分のための涙でした。

がんばれ！って思えたんだ

子どもたちの前では涙を隠したまま、その1年は幕を閉じ、失意の内に4年生の担任となりました。子どもたちは元気いっぱい、「静かに！」と言っても静かにならなくて、担任初日から、児童は教師の言うことを聞くものだという考えがなくなりました。教室に入りたくない、帰りたいと言って、昇降口で動かなくなっている男の子とグリコ対決をしたこともあります。45分かかった激戦でした。もう先生としての見栄がなくなりました。

八千代市には、総合体育祭という行事があり、市内

の学校の5・6年生が集まって、学校ごとに陸上競技や集団演技を披露します。学校では4年生が中心となって壮行式を行い、そこで5・6年生が演技を披露します。何の因果か、前に担任をしていたクラスの子が私の目の前で演技をすることに。1年前、演技の指導をしていた頃は、「絶対に間違えるな！」とか、「もっと素早く移動しろ！」なんて思っていました。しかし、今では心の中で、「がんばれ、がんばれ！」と何度も繰り返している自分がいました。自然と涙があふれてきて、子どもたちの成長を認めてあげられなかった以前の自分は、もうそこにいませんでした。でもやっぱり、泣いている姿は見られたくないので帽子をグッと深くかぶりました。

失敗しても、いつか笑って話せる

先生になるなんて夢にも思っていなかった私ですが、気付いたら6年間、先生をしています。上に書いたことは、先生として決して誇らしいことではありません。私にとっては辛い経験でずっと胸の中にしまっておきたいことでした。それらを書くことができたのは、自分が変わったからだと思います。子どもたちの笑顔を思い浮かべる日々が、私を徐々に変えてくれたのです。悩んでいる真っ最中に、この話を思い切って、先輩の先生に打ち明けたことがあります。先輩は、「子どもと私たちはいつだって、悪戦苦闘。でもね……」。でもねに続いたのは、先生としての喜びでした。私にも、そんな喜びがたくさんできました。先生になると多くの責任もありますし、たくさんの失敗をすることもあります。子どものことが大好きなのに、大切に思っているはずなのに、うまく伝えられないことなんかしょっちゅうです。それでも、大丈夫です。失敗しても、必ず笑って話せるようになる日が来ます。なぜなら、今の私がそうだからです。いつか、みなさんが先生となった時、その喜びを私にも教えてください。

今月のまとめ

- 当初は子どもではなく「自分のため」の学級経営をしていたが、気付いていなかった。
- 先生としてうまくいかない日々もあったが、子どもたちの笑顔を思い浮かべる日々が、徐々に自分を変えてくれた。